

イワン雷帝と奸臣・侍医エリセウス・ボメリウス

栗原成郎

エリセウス・ボメリウス——医師・占星術師

冷酷で猜疑心の強いイワン4世（雷帝）（在位 1530-84）の性情を巧みに操って、暴君の心理状態をいっそう否定的な方向に制御した呪術師にエリセウス・ボメリウスという謎めいた人物がいた。この男は『プスコフ年代記』（1570年の項）では「医師エリセイ дохтур Елисей」「残酷な呪術師 лютый волхв」「悪しき異端者 злой еретик」とよばれ、リヴォニアのドイツ人とリトアニア人がイワン雷帝の残忍さを外敵に向けてではなくロシア内部の廷臣たちに向けさせるために送り込んだ、と考えられていた。

ドイツ人たちはイオアン帝 [イワン雷帝] のもとに冷酷な呪術師の異人を送り込んだ。彼は側近として皇帝の寵臣となり、皇帝を絶えず疑心暗鬼の状態に置いた。[...] そして最後には皇帝を信仰から引き離した。皇帝をしてロシア人に対しては凶暴な振る舞いをさせ、ドイツ人に対しては優しい態度をとらせた。不信心な者たち [ドイツ人たち] は、自分たちが最後には [ロシア皇帝によって] 破滅させられる運命にあることを占いによって知った。そのため彼らは悪しき異端者を皇帝のもとに送り込んだのである。なんとすれば、ロシア人は誘惑に陥りやすく、呪術を好むからである。（『プスコフ年代記』1570年）¹

ロシアで「エリセイ・ボメーリイ Елисей Бомелий」とよばれた人物は、英名をエリセウス・ボメリウス *Eliseus Bomelius* (1530頃-1575?) という。オランダで生まれたらしいが、ドイツのヴェストファーレンのヴェーゼルで育った。父のヘンリー・ボメリウス (1570年歿) は、オランダ南部ボムメル (現在、ザルトボメル) の出身、1540年から1559年までヴェーゼルのルター派の聖ヴィリブロード教会の牧師を務めたプロテスタントの牧師・神学者で、いくつかの宗教書、歴史書の著者として知られた。1555年の春、この教会の近くに、イングランドからの亡命者でプロテスタントのバーティ Bertie 夫妻が「血に飢えたメアリー-Bloody Mary」とよばれたテューダー朝メアリー1世の血なまぐさいプロテスタント迫害をのがれて移り住んだ。このボメリウスの隣人は、イングランドの貴族で、特に夫人は「サフォーク公爵夫人 Duchess of Suffolk」の名で知られたキャサリン・ウイロビー Catharine Willoughby (1519-80) で、王室につながる名門の出である

¹ Сахаров И.П. Русское народное чернокнижие // Сказания русского народа. СПб., 1885. С. 12-13.

が、夫チャールズ・ブランドン公 Charles Brandon の死後、サフォーク公爵家の執事であったリチャード・バーティ Richard Bertie と再婚してバーティ夫人となっていた。ヘンリー・ボメリウスはバーティ夫妻にとって良い友人となった。1555年10月12日キャサリンは男の子を出産し、その子の洗礼式はヘンリー・ボメリウスがつかさどり、息子のエリセウス・ボメリウスが洗礼親となった。男の子はペレグリンと名付けられ、長じてウイロビー・デ・エリスビーの第13代領主の男爵ペレグリン・バーティ（1555-1601）となる。まもなくメアリー女王の手先の捜査・追及の手が伸びたので、バーティ夫妻はヴェーゼルを離れ、ドイツを経てポーランド・リトアニア連合王国へ移り住んだ。エリセウス・ボメリウスが洗礼の子ペレグリンと終始行動を共にしたかどうかは定かではないが、彼はバーティ一家とほぼ同時期にイングランドに入っている。

イングランドにおけるエリセウス・ボメリウス

時が移り、1564年エリザベス1世が即位して、プロテスタント（英国国教会）の信仰を表明するに及んで、バーティ一家は祖国へ帰還した。キャサリン・バーティの奔走によりエリセウス・ボメリウスは、適正な履歴書を提出せずにケンブリッジ大学医学部に入学した。修学年限6年のところ彼は5年で卒業して医学博士の学位を取得した、と言われる。このあたりの経歴が曖昧であるために、数年後ボメリウスはさまざまなめごとを起こすことになる。1564年の夏、エリザベス1世がケンブリッジを訪問したおり、女王に随行した国王秘書長官のウィリアム・セシル卿 Sir William Cecil が、占星術に通じた医師として多少知られるようになっていたボメリウスに、即位して間もないエリザベス1世の寿命と王朝の将来について意見を問うた。セシル卿の御下問を受けたボメリウスが国王秘書長官のお気に召すような予言をしたであろうことは想像に難くない。そのためか、その年ボメリウスの評判は急上昇した。彼はロンドンに上京して、ジェーン・リチャーズと結婚し、中心地に居を構えて開業医となり、ロンドンでも有名な医師の一人となった。ボメリウスの患者のなかには多くの貴族がいたが、彼は貧しい人々にも医療の援助を惜しまなかった。ボメリウスはエリザベス女王に助言を与えることもあった。しかしそれが災いして、彼は女王の侍医であった王立内科医協会 Royal College of Physicians の会長トーマス・フランシスと敵対することになった。トーマス・フランシスは、ボメリウスが王立内科医協会の医師免許を持たないのに医療行為を行なったことを罪状として訴訟を起こした。1567年ボメリウスは王座裁判所 the King's Bench の拘置所に監禁された。一方で、ボメリウスはセシル卿に書状を送り、トーマス・フランシスの天文学とラテン語の知識の欠如を暴く機会を自分に与えてほしい、と懇願した。つづいて

1568年にはケンブリッジ大学の医学博士の学位を持つ自分をオックスフォード大学の医学者系列に加えてほしい、と請願した。

ボメリウスは医療の余暇にイングランドの歴史を研究していた。彼は、その研究の成果として、500年周期で社会的な大激震がイングランドを襲うという自説を手記に記して、その手稿に『有益なる占星術 *De Utilitate Astrologiæ*』という表題をつけた。彼の予測によれば、イングランドは、ノルマン人の征服（1066年）以来500年になる当時、恐るべき破滅の危機にさらされているという。セシルはその予測を価値なきものとして無視したが、ボメリウスの予言は妖術師の疑いが自分自身にかけられる原因となった。貴族のキャサリン・バーティは政府筋との関係を利用してボメリウスを助けようとした。ボメリウスの妻のジェーンも1569年に王立内科医協会の審議会に夫の解放を請願し、さらにカンタベリーの大主教マシュー・パーカーと接触して助力を乞うた。その結果、ボメリウスは禁固刑の代わりに罰金刑の処分で済んだ。ところが、彼には20ポンドの罰金と15ポンドの諸費用を支払う資力がなかったために、1570年の早い段階まで牢にとどめ置かれた。大主教パーカーとセシル卿は、その時ボメリウスを国外退去の形で釈放することを心のうちに決めていた。

モスクワ会社

ちょうどその時代、イングランドとモスクワ大公国との間に通商関係が成立しており、「モスクワ会社 Muscovy Company」という半官半民の海外貿易会社がロンドンに設立された。モスクワ会社は、16世紀の商工業者ギルドの系列のなかで別格の位置を占めていた。この会社の設立者名簿にはイングランド政府の「お偉方」が名を連ねていた。200人におよぶ設立者名簿の第18番目にはウィリアム・セシルの名前がある。モスクワ会社は、国会の認可によるイングランド最初の勅許会社であり、商業上の利益よりも政治上の利を主眼とする会社であった。イングランド船はロシアに武器とさまざまな贅沢品を輸送した。ロシア皇帝（ツァーリ）の要求により商品の積荷と共にさまざまな職種の専門家が乗船した。専門技術者のなかでツァーリが最も必要としたのは、医師であった。モスクワ大公国にはイングランドからすでに幾人かの医師が派遣されていた。

1568年夏、ロシア大使アンドレイ・ソーヴィン Андрей Григорьевич Совин がロンドンに着任した。ソーヴィン大使の公的な任務は露英同盟条約を締結することにあつた。条約のなかには、本人の自由意志によりロシアへの出国の希望を表明した専門技術者たち（医師を含む）の提供に係わる条項があつた。それに加えて、政治的亡命者たちの両国間における相互保護の供与に関する合意が内密の要求項目として含まれていた。この交

涉に調印するイングランド側の代表は、セシル卿であった。同盟条約は、1569年に条文の最終的な修正を経て批准され、専門技術者たちの派遣の条項はエリザベス女王の是認を得た。その時点でセシル卿の腹の中には医師ボメリウスの放出があった。ツァーリの侍医としてロシア皇室の中にいることは、ツァーリの私生活ならびに国政についてのきわめて豊富で正確な知識・情報の所有を意味する。ロシア政府が秘密情報のクレムリンの城外への漏出の防御に神経をとがらせていることには、疑いの余地はない。イングランド政府は貴重なクレムリン情報を直接手に入れたかった。イワン4世の時代にそのような情報提供者に最適な人物として選ばれたのが医師・占星術師エリセウス・ボメリウスであった。ボメリウスは、セシル卿にロシアの政治的情報を提供し、毎年なにがしかの贈り物を送るという密約を胸に秘めてロシアへ渡った。

ロシアにおけるボメリウス

1570年6月中旬、ボメリウスを乗せたイングランド船は北ドヴィナ川河口の白海の港に着船した。ボメリウスは、宮廷に入ると、すぐにツァーリとその家族の病気を治療したばかりでなくツァーリと王朝の未来を占う占星用天空図を作成した。才気縦横のボメリウスは、ほどなくイワン雷帝の寵愛を受けるようになった。雷帝は誰の意見に対しても聞く耳をもたなかったが、この「冷酷な呪術師」の見解には一種の畏怖の念をもって従った。イワン4世の宮廷にはつねに陰謀が渦巻いていた。中傷・誹謗・密告・誣告が飛び交った。負け組には恐るべき刑罰が待っていた。

カラムジーンによれば、「悪意に満ちた中傷者ボメーリイは、毒草を調合して、毒を盛られた者が定められた時に息絶えるようにした」。ボメリウスは、雷帝の命令により即効性のある毒草の調合にとりかかり、謀反の疑いのある家臣たちをその効き目の被験者にした。犠牲者は、暴君が定めた時に息絶えたという。ボメリウスがイワン雷帝の健康状態の維持・改善に努めたことはほぼ確かで、そのため彼は、4年間は雷帝の絶大な信頼を得ていた。プスコフ・ペチェルスキ修道院の院長コルネリイが、殺人者・黒魔術師を側近におくことは皇帝のなすべきことではない、と忠告したとき、雷帝は激昂して修道院長に厳しい刑罰を与えた、と言われる。しかし、ボメリウスの中傷・誹謗は逆に彼自身に関する不利な情報をツァーリのもとに集める結果となった。ボメリウスは宮廷内の陰謀の犠牲となり、「ラテン語とギリシャ語で書かれた書簡によりポーランド王ステファン・バトーリと内通している」と密告された。

1575年、北海とバルト海をつなぐ航路が開通され、イングランド船がポーランド王の支配下にあるリガに入港できるようになった。その年の秋、国庫の貴重な薬草の備蓄が

尽きかけたので、ボメリウスはイングランドからの薬草を手に入れるために、単身リガに赴いた。しかし、すでに背信の疑いをかけられていたボメリウスはプスコフで捕えられてモスクワへ連れ戻された。恐るべき拷問が彼を待っていた。その当時、モスクワ会社の社員で英露通商の交渉人・通訳としてモスクワに滞在してイワン雷帝の宮殿に出入り自由の身であったジェローム・ホーセイ Jerome Horsey (1573-91 ロシア滞在) は、ボメリウスの拷問を目撃した。彼の証言によれば、寵臣の侍医の背信に衝撃を受けたイワン雷帝は、ボメリウスの両手の関節を外し、両足を股裂きの形で広げ伸ばし、背中と体を針金で編んだ鞭で打ち据えたうえで回転式焼き串に縛り付け、血抜きをして、火で炙るように命じた。ボメリウスは、生きていく徴候のなくなるまで火責めにあったが、頑として罪状を認めなかった。ボメリウスは、半死半生の体で櫓に載せられてクレムリン城外の地下牢へ運び込まれ、その途中で目を開けてキリストの名を呼んだという。ボメリウスは間もなく死亡した。ホーセイは「ボメリウスは雷帝の特別な寵愛を受けて贅沢三昧に暮らした。練達した数学者だが、邪悪な人間、多くの災害の元凶。大貴族の多くは彼の処刑を喜んだ。なぜなら彼は大貴族に関して多くのこと知りすぎていたからである。彼は莫大な富と財宝をイングランド経由で、ケンブリッジ育ちにもかかわらず、生まれ故郷のヴェストファリアのヴェーゼルに送った。彼はつねにわが国民の敵であった」と述べ、ボメリウスに対して好意的ではなかった。² 彼の妻ジェーンは 1583 年になって、エリザベス 1 世の請願に応じた雷帝の子フェオドル帝の命により故国に帰された。

「ロシアにとっても敵、イングランドにとっても敵」と非難されたエリセウス・ボメリウスに関しては信頼し得る伝記的記録はなく、学術的な先行研究もないので、この記述も伝説の域を出ない。

イワン雷帝の最期

イワン雷帝の宮廷ではボメリウスの後継者が絶えることはなかった。のちにイングランドの外交使節となったジェローム・ホーセイの証言によれば、雷帝は重病に陥ったとき、自分の寿命が知りたくて、宮廷に集めた呪術師たちに自分の死期を問うた。1584 年モスクワに彗星が現れて、クレムリン宮殿の上に十字架状のしるしが映った。イワン雷帝はこの彗星を見て「これは余の死のしるしだ！」と叫んだ。雷帝はロシア北方から占星術師たちを呼び集めた。その数は 60 人に及んだ。占星術師たちは、互いに相談するこ

² *Russia at the Close of the Sixteenth Century: the Treatise «Of the Russe Common Wealth» by Giles Fletcher; and the Travels of Sir Jerome Horsey, Knt., now for the first time printed entire from his own Manuscript.* ed. by Edward A. Bond. (London: Hakluyt Society, 1856; repr., New York: Burt Franklin Publisher, 1963), p. 187.

となく、イワン 4 世の死期を 1584 年 3 月 18 日と予言した。雷帝はこの予言を信じなかった。3 月 18 日、この日、雷帝は朝から上機嫌で、予言者たちを焚刑に処するために、薪の山を準備させた。占星術師たちは、日が沈むまでは一日は終わっていない、と主張し、日没まで火をつけるのを待ってほしい、と懇願した。雷帝は、風呂に入ってから午後 3 時ごろ大貴族ボグダン・ペーリスキイを相手にチェスを指そうとして駒を並べている最中に発作を起こし、意識を失って仰向けに倒れた。その手には「王将」の駒が握りしめられていた。イワン雷帝は間もなく死亡し、クレムリンの大天使聖堂に葬られた。雷帝の死後、占い師たちは全員解雇された。³

Ivan the Terrible and his Treacherous Court Physician Eliseus Bomelius

KURIHARA Shigeo

Eliseus Bomelius (died c.1575), physician and astrologer of Dutch-German origin, was one of the favorites of Ivan the Terrible and served him as court physician for several years, but was involved in the court intrigues and died after brutal torture on the rack. Bomelius was a mystery man who had a checkered career in the convulsed times of religious and political conflict between Protestantism (the Anglican Church) and Catholicism in England of the 16th century.

Protestant Bomelius was under the patronage of Mrs. Bertie, née Catharine Willoughby of noble birth, titled as Duchess of Suffolk, and was educated at the University of Cambridge, where he proceeded to the degree of medicine. As a physician and astrologer Bomelius made a high reputation in London. Soon after, in 1567 Bomelius lost his fame, being arrested at the instance of Dr. Thomas Francis, president of the College of Physicians, for practicing medicine without license of the college. Bomelius became a great trouble to Sir William Cecil, influential politician of the English Government, and politely exiled to Russia as one of most important export items — medical doctors needed by the Kremlin court — of Muscovy Company (the Russian Company, body of English merchants trading with Russia, founded in 1555).

³ *Афанасьев А.Н. Поэтические воззрения славян на природу. Т. 3. М., 1869, С. 619-620.*

Eliseus Bomelius, condemned by as an enemy to Russia as well as to England, met a violent end far beyond the understanding of ordinary mortals. He was an unfortunate victim of English diplomacy with Muscovite Russia.